

# 渦語り (四)

文・小西一三  
絵・小西由紀子

## 「氷下漁のこと」④

八郎渦に氷下曳網漁法が伝えられたのは寛政六年（一七九四）のこと。久保田町（現秋田市）の商人、高桑屋与四郎が信州諏訪湖の漁法を習得し伝えたのが始まりといわれています。それまでは厚い氷の張る冬は、ほとんど休漁状態。この画期的な漁法はたちまち周辺一帯に伝わり、十年後の文化元年（一八〇四）には八郎渦全域で、五十余統の氷下漁が行われていたと伝えられています。

この氷下漁を可能にしたのが、氷に穴を開けるテジカラ（渦鋏）、氷の下にツナを繰り出すサオ（ツキザオ）、ツナの先につくクリツナなどの漁具類でした。前回に続き、塩田地区の桜庭為治さんに話をうかがいました。

### 鋭い刃先で氷に穴を開けた、テジカラ

私らの場合、九人〜十人で一組。その中で船頭さんは網入れの場所を決めるだけで、穴開けなどの作業はしねのよ。我々は船頭さんの指示で穴を開け、網を入れ、氷の下にツナを通し、網を引くのが仕事。今のワカサギ釣りの連中のようにツルハシなの使ってたら、時間がなんぼあっても足りね。特に網を揚げるための穴は四メートル四方以上の大きなものだから、このテジカラで氷を切るようにして穴を開けていったもんだ。

テジカラの刃は鍛冶屋へ特注。柄の部分は自分の体格に合わせて、使いやすいように自分で作る。刃先は毎日のように研いだもんだな。切れ味の悪いテジカラ持ってたれば、疲れるのは自分だもの。当時は今より氷も厚く、場所によっては三尺近くもあったな。



最初は綿入りのチャンチャンコ着ても、かなりの重労働だ。最後の方にはランニング一枚になることもあったな。氷が割れて落ちたり、氷に乗ったまま流されたり、テジカラでケガをしたり……。危険な漁でもあったな。二月下旬か三月上旬でこの漁が終わると、渦の漁師のほとんどは、北海道のニシン場さ出稼ぎよ。